# BOOK REVIEW

## やさしいディベート入門

### 人生に勝つための知的技術

松本　道弘著

一九九〇年、中経出版

「ディベート」という言葉が最近随分と一般化してきたように感じられる。しかし、ディベートを理解し、実際にディベート能力を持っている人というのは極めて少ないのが現実だろう。

ディベートというのは、単純に訳すと「議論・討論」となるが、これまで日本で行われてきた単なる討論（ディスカッション）や話合いとは本質を異にする。

あるコミュンケーション学の教授は「ディベートとは検証を重ね議論を闘わせることにより、あるひとつの論題に対する理論的・理性的判断を下す思考過程」であると定義づけているが、これだけでは具体的にどのようなものなのかイメージすることが難しい。

日本人は一億総評論家と揶揄されて久しいが、その分言葉の使用に対して慎重さを欠くようになった。無責任な「情」や「我」ばかりが先行して一向に問題解決にならないことも多い。

「やさしいディベート入門」の著者松本道弘氏は、日本人の討論の欠点を次のように指摘する。

『日本での討論は、言いっ放しに終わったり、相手の議論に対する反駁を充分に伴わなかったり、時には感情的議論に走ったりすることがある。物事には常に表裏両面がある。一方を見ただけでは本質はつかめない。だが人は往々にして自分に都合のいい面だけを考えがちである。自分が良しとするものは他人も良いと思い込む。いったん思い込むと譲れなくなる。さらにそこに意地が加わる。すると引っ込みがつかなくなり、泥試合となるか取っ組み合いの喧嘩である。』

さらに続けて、『ディベートはそのような思い込みを許さない。なぜなら争点の両面を見なければ勝てないからだ。ひとつの問題の両側面を見ることではじめて、自説の欠陥も見えてくる。相手の言い分も理解できる。議論はそこから始まるのである。日本に公式のディベートがあるとすれば、それは裁判であろう』と語っている。

こうなると「なんだ、ディベートというのは専門家のものか」と思いがちであるが、決してそうではない。

ディベートとはお互いが何を考えているか、感じているか、知っているかを確認し合い、どうしたらより良い方向へ向うのかを導きだす手段である。

ディベート能力を身につけることはすなわち、①客観的分析力、②論理的思考力、③発表能力、④積極的傾聴能力、⑤情報収集力を養うことにつながる。

環境問題をはじめ、私たちの生活を改善していくためには、今後多くの人がディベート能力を身につけることが必要だろう。いろいろな立場の人がお互いにコミュニケーション出来ることが問題解決の第一歩であると考え、本書を紹介する。

ディベートに関心のある方は、「これがディベートのやり方だ！（同著者・同出版社）」「ディベート能力の時代（北岡俊明著・産能大学出版部刊）」といった書物も刊行されているので併読されたい。

（中経出版発行、一九九〇年七月刊、定価一、三〇〇円）

評者
北星学園女子短期大学
生活経済研究室研究員　赤城由紀